

本誌では年間の特集の一つとして、必ず整形外科関連の話題を組むことを慣例としています。今回は整形外科のなかでも作業療法などリハビリテーションの臨床ととくに関連の深い、「手の外科における最近の進歩」を取り上げることとしました。Microsurgery, 再生医療など、手の外科領域でもいろいろな話題がありますが、日常遭遇することの一番多い骨折治療の問題に始まり、末梢神経再生の問題、職業病の問題などを、この分野の専門家の方々に分かりやすく解説していただきました。さらにハンドセラピー学会も設立以来かなりの期間が経ちましたので、ハンドセラピストの活動、役割などについても、特集の1本として組み込んでみました。

■骨折治療の話題

手の外科領域の骨折に対する手術は、内固定材料の進歩により大きな変革を遂げているが、本稿では、そのなかでもとくに進歩の顕著な手関節周囲の骨折である橈骨遠位端骨折および舟状骨骨折に対して、最近の整形外科の治療が解説されている。高齢者の橈骨遠位端骨折では整復位の保持が難しかったが、新しく開発された plate により強固な固定が可能となり、治療成績の向上に結びついている。舟状骨骨折は、診断の困難さ、血流の悪さからくる骨癒合不良が臨床上問題となるが、新鮮であれ陳旧性の骨折であれ、確実な診断のもとに必要な場合には積極的な手術的加療が施行されるべきである。(田野確郎氏ら, 409 頁)

■末梢神経再生

末梢神経は中枢神経と比較して旺盛な再生能を有している。とくに末梢神経損傷では、筋あるいは知覚終末の変性が生じる前に神経の再生を得ることが重要となる。本稿では、末梢神経の再生について、再生神経の形成および神経周膜の再生が、形態学的に、さらに分子機能的に分かりやすく解説されている。同時に末梢神経同種移植に関して、その基礎と臨床応用の結果についても詳しく述べられているが、免疫抑制剤を長期に使用するため、日本では末梢神経同種移植に対して現状ではコンセンサスが得られていない。(岡島誠一郎氏ら, 415 頁)

■職業病と手の外科

近年、さまざまな職業における手の重要性が認識されるようになってきているが、職業病に関しては傷害ないし障害の治療のみならず、作業方法、労働環境の整備などによる予防が不可欠であり、医療関係者はもとより労働や作業を管理する側の理解が大切となる。本稿では、日常臨床でよくみられる手根管症候群、バネ指、de Quervain 病、Dupuytren 拘縮、Heberden 結節に関して概説がなされた後、職業音楽家(吹奏楽)を例に職業病の予防、治療などについての言及がなされている。とくに、種々の補助具や装具の改良、開発が重要なことも強調されている。(有野浩司氏ら, 421 頁)

■ハンドセラピストの現状と課題

1988年に発足した日本ハンドセラピー学会は、手の外科医とともに臨床に携わっている作業療法士、理学療法士から構成され、現在114名の会員を有する組織として活動している。学術集会の開催、国際交流などを中心とした日本ハンドセラピー学会の現状が紹介されるとともに、手の外科医との連係、生涯教育、資格制度などに関する今後の課題についても言及されている。(大森みかよ氏ら, 427 頁)